

公平本（金平本）について

——和漢書貴重図書目録の周辺——

大原 理恵

はじめに

東北大学附属図書館では平成 17 年度に『貴重図書目録 和漢書篇』を刊行し、凡例に「その他の改変事項・参考文献等については、東北大学附属図書館報『木這子』に掲載予定。」と注記していたが、より適すると思われる本誌に掲載する¹。平成 17 年度版目録は貴重図書を大きく「古写本古刊本」「原本稿本名家書入手沢本」「書画画図」「稀本」に分けている。これは従来の『別置本目録』を踏襲したものである。今回は「稀本」のうち「公平本（金平本）」を対象とする。全般的な事項については別に報告を用意する予定であるので、本稿では全体に共通する事項などは省略する。本稿のような各分類個別の報告も今後続けて行う予定である。

本稿は、平成 17 年度版『貴重図書目録 和漢書篇』の記述が簡略であるためその補足を目的とするが、主として図書館員が今後貴重図書利用方針の検討や貴重図書追加指定または再検討等の際に参考とする場合を想定して記述する。周知の内容も少なくないであろうが、便宜のためまとめておく。主な記述内容は次のようなものである。

- ・昭和 36 年度版『別置本目録』との相違点（配列・記述方針等）
- ・追加貴重図書の紹介
- ・主な複製・影印・翻刻・参考文献
- ・由来・関連資料・指定当時の事情・評価
- ・その他注意すべき事項等

このうち、貴重図書としての評価については、最初に貴重図書目録が刊行された昭和 11 年前後を中心に記述することを、特にお断りしておく。その後評価が変動した資料も当然あり、また今後もあり得る。それは、新たな発見・研究によって評価が書き換えられた場合だけではなく、価値観自体の変化に起因することもある。その資料に如何なる価値が認められているのかということもさることながら、如何なる意味で別置本としたのかを推定することを目的とする。本稿では、原則として昭和 11 年版『和漢書別置本目録 未定稿』・昭和 36 年度版『別置本目録 増訂稿』を『別置本目録』（両者を区別する場合は年度を示す）平成 17 年度版『貴重図書目録 和漢書篇』を『貴重図書目録』と称することとする。

1. 公平本（金平本）の目録記述・構成と評価・複製作成 附歌舞伎 一狩野亨吉と金平本一

村岡典嗣（東北帝国大学教授・附属図書館長）は「狩野文庫について」（昭和 12 年 10 月）²において狩野文庫の特色を述べるなかで「聚書としては、書目類約二百部、地図約一千百八十三部、和算書約一千二百六十八部、黄表紙四百三十一部、孝経二百二十一部、金平本四十部、和漢朗詠集三十部の如きは重なるものである。」（p13）と特筆しているが、上記のうち聚書全体が貴重図書となっているのは、金平本のみである。昭和 11 年『別置本目録』収載狩野文庫本は 565 点であり、あるジャンルの資料

が 40 点も一括別置されるのは異例といえる。

「公平本」は「金平本」と書くのが標準的であろうが、昭和 11 年『別置本目録』以来「公平本」と表記している。『古浄瑠璃の新研究 慶長寛文篇』（若月保治 新月社 昭和 13 年）も「公平浄瑠璃」とする。確かに当館所蔵の「きんひら云々」の書名をもつ資料の題簽等をみると、「公平」の表記の場合が多い【写真 1】。

貴重図書目録における分類を「金平本」または「古浄瑠璃」等と改めることも検討したが、最終的には従

1 「随筆・雑記類について：和漢書貴重図書目録の周辺」大原理恵
2 『狩野文庫概説』東北帝国大学附属図書館 昭和 12 年 11 月

東北大学附属図書館調査研究室年報第 1 号 2012 年 3 月参照。



【写真1】

来の分類と表記を踏襲した。ただし本稿では以下原則として「金平本」と表記する。

『東北帝国大学所蔵狩野氏旧蔵書仮目録』(大正3年2月)では、「国文学」の下に「公平本」の分類があり(配列は、「人情本」と「狂句」の間)、書名・配列は多少異同があるが貴重図書に指定された43点が書名五十音順に記載されている。後に「歌舞伎」とされる3点も含まれている。この3点は『別置本目録』編纂時に分離された。公平本は、その後整備された狩野文庫分類では第4門語学文学—国文学—戯曲演劇—浄瑠璃本となり、古浄瑠璃と他の浄瑠璃本は分けられていない。『東北大学所蔵和漢書古典分類目録』(東北大学附属図書館 和書 中 昭和53年1月)では「六音楽演劇—(七)浄瑠璃—七古浄瑠璃」に分類される。

『貴重図書目録』の配列・記述ともに、昭和36年度版目録とほぼ同じである。目録における配列方針の変更も検討したが、従来通り原則として書名五十音順の配列とした。「朝鮮せいばつ記」(宇7-779)のみ元の配列を変更し「太閤軍記」(宇7-776)の次に置いた。

目録記述のうち、昭和36年度版では全てに行数記述があるが、昭和11年『別置本目録』では一部の資料のみである。ただ、それは十六行以外の本に限られているので、金平本においては十六行を標準と考えその他のもののみを記したのだとすれば(ただし徹底していない)、それは目録方針の違いであって両者の情報量の差は無いことになる。

「丹緑本」の記述も昭和36年目録で追加されたものであるが、検討を要すると指摘されていたこともあって、多くは削除したり「後補彩色」の記述に変更したが、方針が一貫せず、昭和36年目録を前提としなければ意

味不明になりかねないので、削除するのがより適切であった。書名はもと内題優先の方針をとっていた(昭和11年『別置本目録』凡例参照)。書名・表記については原則として変更しないことにしているが、書名としてやや分かりにくい「公平末春」(宇7-763)などは題簽や国書総目録等を参考に「公平末春いくさろん」に改めた。書誌情報が重視される原題簽が存する場合はそのことを記した。題簽から採られた目録記述もある。本の大きさは、『貴重図書目録』では縦横をセンチメートルで示するのが原則であるが、金平本については従来「大形」「小形」で示していたのを踏襲している。現在の表紙の大きさと、本文匡郭の大きさが極端に異なっている場合のみ、表紙の大きさと匡郭内寸(縦)をセンチメートルで示した。「大形」がしばしば「大型」となっているのは校正の下手際であるのでお詫び申し上げたい。末尾に訂正一覧を示す。全体の正誤表はまた別に公表の予定である。

昭和11年『別置本目録』では、40点全てが狩野文庫から別置指定したものである。昭和36年度『別置本目録』でも増減はない。平成17年度『貴重図書目録』で1点『大友のまとり 弘法大師之御本地 酒顔童子 かるかや』(延-1907 丁B1-8, 1-15)を狩野文庫以外の旧分類古典から追加した。4種4冊を1帙にまとめ1点として扱っているもので、損傷の甚だしい本を丹念に修復し特別の帙に収めてあった【写真2】。昭和13年受入。『東北大学所蔵和漢書古典分類目録』(昭和53年)では「六段本」とする。



【写真2】

『貴重図書目録』では各冊についての記述がない。貴重図書目録記述方針により示す。

大友のまとり 近藤清春画 刊本

小形十六行本 一冊

弘法大師之御本地 享保四年〔うろこかたや孫兵衛〕

小形十六行本 一冊

酒顔童子 享保五年うろこ形屋孫兵衛

小形十六行本 一冊

かるかや 刊本

小形十七行本 一冊

これらは、保存状態も良好ではなく個々にみれば貴重性は劣るであろうが、あわせて保管することによる聚書としての価値を考慮して貴重図書とした。

狩野文庫の金平本の状態の良さは、格別であるという。古浄瑠璃本の研究・収集につとめた横山重氏は次のように絶賛する。

狩野先生も「本通」である。それよりも、先生の持った本は、皆キレイだ。東北帝大の本を見てそう思うが、あれだけキレイな本を揃えるには、他にかなりの犠牲があったと見なければならぬ。

「古浄瑠璃の正本をめぐって（一）」『書物搜索』横山重 角川書店 昭和53年 上p240

含みを残した表現だが横山氏の狩野に対する敬意は明らかである。また『京今宮御本地』（字7-757）については

この本〔四天王鬼退治〕は、狩野文庫の「京今宮本地」と、表紙その他、全くおなじ極上本であるが、刊記のあるだけ、わたしの本の方が上かもしれない。が、狩野文庫本は、皆いい。

『書物搜索』横山重 角川書店 昭和54年 下p380

『京今宮御本地』の表紙を右に示す【写真3】。これが、金平本小形本の典型的な表紙のようであるが、きらびやかであるけれども損傷しやすく、当館所蔵本でも、ほとんど模様が残っていないものが少なくない。



【写真3】

次に示すの小形本の一群【写真4】は「須田」の蔵書印がみられるもので、その中には年代を記した紙片が貼られているものがある【写真5】。



【写真4】「須田」の蔵書印がある本の表紙



【写真5】『伊豆日記』（字7-755）末尾

また「須田」の印は見当たらないが、同様の模様のある題簽が用いられているものがある【写真6】。



【写真6】

この内、『花鳥大全（序）』（字 7-768）には後見返付箋に朱で「後は昔物語にからかみ表紙の金ひら本云々とあり即是歟」とある。これは手柄岡持の随筆『後は昔物語』序文（享和三年）を踏まえたものである。

南野英才、古を好むのあまり、近世の俗事といへども、今、世にのこることの稀なる品を穿て、其世々の趣を察し、から紙表紙のきんぴら本のたぐひ、古き戯場の番附、青楼の細見などをさへに、集めてたのしみ給へり。
『後は昔物語』自序³

「からかみ表紙」についての詮索⁴はここではさておくが、小形本の表紙は改装されている場合も少なくない。改装であってもやはりそれにふさわしいものが選ばれているように思われ、そこで用いられた表紙が改装者の「からかみ表紙」の解釈を示している場合もあろう。

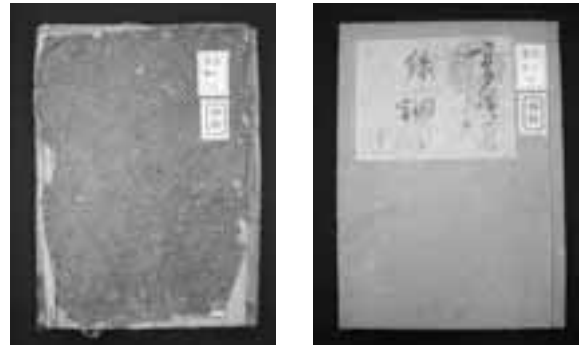
改装された本について見てみよう。次の「福田文庫」の蔵書印のある本【写真7】はいずれも本来かなり損傷していたものらしく、裏打をして改装されている。聚書としてまとめられたものと推測される。



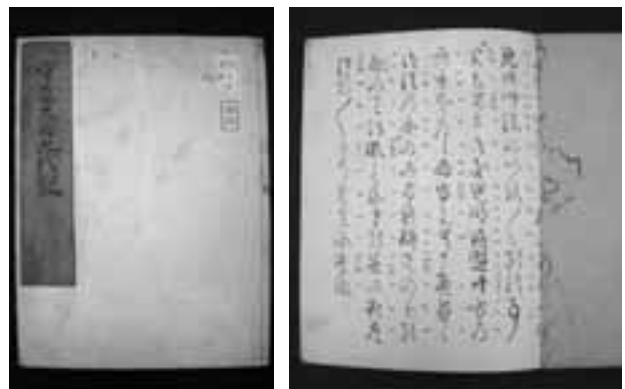
【写真7】「福田文庫」蔵書印がある本の表紙

そのほかに改装とみられる表紙には次のようなものがある【写真8】。

大形本の表紙改装で目につくのは『守屋大臣九代記』（字 7-786）で【写真9】、光悦謡本の表紙を転用したものらしい。



【写真8】『あいこの若』（字 7-756）・『織田軍記』（字 7-751）



【写真9】『守屋大臣九代記』（字 7-786）表紙と後表紙内側

『別置本目録』では金平本の分類の末尾に三点、「（歌舞伎）」と注記のある資料がある。その事情について『別置本目録』編纂に当たった矢島玄亮氏は、目録編纂中に金平本調査のため来訪した研究者の指摘で急遽注記をしたとする。

〔昭和〕10年頃若月紫蘭先生が研究に来館された。氏は洋大教授で科学研究の為来訪し凡そ3週間位滞在した。暑休を利用してのようであつたが、その結果が古浄瑠璃の新研究である。その研究により当時別置本の原稿作成中であつた本館としてはその訂正もできて、帝大の図書目録の欠点をさらけだすのが防げ、校正者の名もけがさずにすんで実に有難かつた。其はもちろん浄瑠璃関係で一谷坂落、業平河内通、箱伝授にカブキと註記することですました。
「狩野本研究来館者」

「狩野文庫についてー在館33年の思い出ー」矢島玄亮 『MAUL 宮城県大学図書館協会会報』27 1966年4月 P8

これら3点（一谷坂落（字 7-791）・業平河内通（字 7-792）【写真10】・箱伝受（字 7-793））は新群書類従第三（明治41年8月刊・「例言」水谷不倒）に翻刻されている「狩野氏蔵本」ではな

3 引用は、日本随筆大成 第3期12 新装版 吉川弘文館 平成7年 による

4 『書誌学談義 江戸の板本』中野三敏 岩波書店 1995年 p138 参照。

いかと推測される。東北大学附属図書館で作成した手書の昭和十年四月十五日付「別置本目録（狩野文庫）」⁵では函架番号は一谷坂落「宇7-755」業平河内通「宇7-783」・箱伝授「宇7-784」となっていて、公平本の中に配列されていた番号のままに、



【写真10】

「(五) 諸種版本」に分類されている。その後11年目録刊行時には再び公平本の分類の後に置かれ、函架番号も修正したことになる。『貴重図書目録』においては、「歌舞伎」という分類の下に配列した。

狩野文庫の金平本は高い評価を得ていたが、『公平千人きり』⁶（宇7-764）【写真11】は「馬琴」の蔵書印があり同書の写真の挿絵【写真12】が曲亭馬琴の随筆『燕石雜志』に掲載されていることもあってよく知られている本である。



【写真11】



【写真12】『公平千人きり』（宇7-764）挿絵

『後は昔物語』序文にうかがえるように金平本の蒐集・研究は明治以前に既に始まっていた。その根底には消えゆくものへの哀惜の念があった。金平本の価値を理解するためにはその心情への共感が必要になってくる。水谷不倒（弓彦・1858-1943）は『繪入浄瑠璃史』⁷において、明治末期に絵入古浄瑠璃本がもてはや

された様を次のように述べる。

著者の古浄瑠璃鑑賞は、明治の末年からであるが、当時は、東西の蔵書家に、此種の絵入本が、豊富に貯蔵されて、研究には又とない時期であつた。蓋し公私の間に、古書の展覧会が流行し、古浄瑠璃の如きは、古書中の花形として迎へられたので、各自秘庫を開放し、其多きを誇り、あらゆる絵入本が展観された。 p8

東京帝国大学附属図書館にも狩野亨吉ゆかりの古浄瑠璃本が所蔵されていた。だが関東大震災で焼失する。

古浄瑠璃本集凡二百部、仮名草紙、西鶴物、八文字屋物などの江戸古小説類凡一千部、同じ小説の一種所謂黄表紙凡八百部なども注目すべきものであらう。此等は大部分名古屋の大野屋旧蔵の本で或一時に収容された。（中略）古浄瑠璃本集のみは大野屋に関係無く東京で狩野文学博士が発見されたのを請うて割愛して貰つたものである。

「東京帝国大学附属図書館の罹災に就いて」和田萬吉 図書館雑誌 54
日本図書館協会 大正12年12月 p6

この聚書が東京帝国大学附属図書館に収められた経緯とその特徴について、水谷不倒はその焼失を惜しむ文章の中で詳細に述べている。点数が多いばかりでなく、異様に思われるほどの美本であつたという。

当時最大絵入本のコレクションは、いふまでもなく、元帝国大学図書館であつたが、此所で焼失した絵入本は、大本（上方版）が六十一種、中本（江戸版）が五十六種、合計百十七種で、（中略）其の品質についていへば、殊に上方本に優秀なものが多かつた。（中略）『外題年鑑』などには漏れてゐる、貴重な正本が多数を占め、又其の正本が、板おろし同様の美本であつたことは、特に注意を惹いた。どうしてこんな立派な本が、かう沢山伝はつてゐたかといふ事に就いては、素より知るに由もないが、或は板木が残つてゐて、後に摺つたものであらうといふ説もある。

（中略）此の書は其の頃末広町の吉金の手で、約三百円程で売物に出てゐたのを、狩野博士の勧めで、当時の図書館長和田博士が買はれたといふ、今から思ふと、真に夢のやうな話である。

「関東の大震災に亡失せる古浄瑠璃絵入本について」『水谷不倒著作集』第4巻 p357-358（初出：『歴史と国文学』16巻2号 太洋社 昭和12年2月）

5 「東北大学附属図書館和漢書貴重図書目録の刊行について（一） 一昭和11年版『和漢書別置本目録 未定稿』刊行とその周辺」大原理恵 東北大学史料館紀要8 東北大学史料館 2013年3月 p82 参照

6 題簽題・内題ともに「金平」であるから目録の表記も「金平」とすべきであるが、従来の表記を踏襲している。ただし、『東北大学所蔵和漢書古典分類目録』及び『東北大学附属図書館所蔵 狩野文庫目録 和書之部』（平成6年）は「金平」とする。昭和10年4月の手書目録も「金平」である。

7 引用は『水谷不倒著作集』第4巻 中央公論社 昭和49年 所収『新修繪入浄瑠璃史』による。

大きな損失であったが震災前に調査は行われていた。若月保治(紫蘭)氏は、瀬原退蔵氏の未刊の調査記録によってこの欠落を補っている。⁸

村岡典嗣は狩野文庫蔵本の複製について「また蔵書中、特に出願されて出版されたり、複製されたものも少くない。たとへば金平本、石橋山七騎落以下十六部十六冊の」(『狩野文庫について』p13)と筆頭に金平本を取り上げている。

この複製事業の経緯についても水谷が詳細を書き残している。水谷が資料の選択・解題を担当したが、それは狩野の推挙によるものであった。

大正十一年の冬であった。大阪毎日新聞社の岩井武俊、京都便利堂の主人田中傳三郎両氏の来訪を受けた。用向は来年『大阪毎日新聞』の、一万五千号記念事業として、金平本を集めて、覆刻したいと思ひ、今日狩野(亨吉)博士を訪ねたが、狩野博士は、金平本の事なら、私より水谷の方が詳しいから、彼地〔あちら〕へ往つたら可からうといふことで来た。

それはようこそ、しかし私は、一二年前に、持つてをるもの六十種程、他に譲り、それが借りられるなら、何とか成りますが、一昨年の震災の時、悉く焼失してしひ、残念ながら、御希望に添ふことが出来ないから、あしからずと、一たんは断つたが、岩井氏は、しかしお持ちの本は失くとも、何処かで其れを選んで、間に合せる訳に行くまいかと、三十種ほど入用であるといふ。

それは出来ぬこともない。(中略)そこで先づ帝国図書館・東北大学図書館・岩崎文庫等に就いて、岩井・田中両氏が善本を撮影し、なほ個人のものとしては(中略)を合せ三十種と、コロタイプにして出来上つたのである。

「不倒翁八十年の思出話」『水谷不倒著作集』第8巻 中央公論社 昭

和52年 p224-225

「大正十一年の冬」とあるが、話の内容は関東大震災後である。『大阪毎日新聞社史』(小野秀雄 大阪毎日新聞社・東京日日新聞社 大正14年4月)によれば、大正14年2月27日に「一万五千号」に至り、種々の記念事業を発表したが、その一つが「四、秘書大観と珍書大観 前者は主として江戸時代以前の古写本、支那迭書、絵巻物類、珍書大観は江戸時代の写本、版本、浮世絵類を集成刊行するものにて、是等珍書の湮滅を防がうとするものである。」(p155)。東北大学狩野文庫の金平本は当時としては大震災のあと残された貴重な資料としてその価値が高まっていたのである。

なお、狩野文庫には水谷の『繪入淨瑠璃史』(上・中・下 精華書院 大正5年)『新修繪入淨瑠璃史』(大洋社 昭和11年)双方を所蔵する。新修版「凡例」に「此〔初版〕『淨瑠璃史』は、古書保存の意味から申すと、挿入図版の木版は他に類例少く、絵入本の表紙又は画面の一部分を、原寸の俣、当時の名板木師大塚祐次・谷村勝次郎氏等が、心血を注いで彫刻したもので、頗る精巧な版画であります」(『水谷不倒著作集』第4巻 p12)と、初版独自の価値を特筆している。

金平本は、古淨瑠璃研究・中世文学から近世文学への文学史的研究・近世初期出版史等の研究資料として重要であるが、何よりも、愛すべき本であった。その意味で過剰とも思われる改装も理解する必要があるであろう。研究者もまた一方では愛好者であった。しかし、愛好よりも研究の色彩が濃くなっていくのはやむを得ないことであったかもしれない。

2. 狩野文庫金平本の調査研究状況 ―昭和11年頃の仙台―

狩野亨吉が所蔵している間にも金平本の調査は行われていたと思われるが、東北帝国大学の所蔵となつてから、若月保治氏と横山重氏が狩野文庫の金平本を調査したのは、昭和11年『別置本目録』編纂の頃であった。両氏はそれぞれ仙台来訪の回想記を残している。当時の文献調査のあり方や仙台の雰囲気がうかがえるので、やや詳しく紹介してみることにしたい。

東北帝国大学附属図書館で昭和11年版『別置本目

録』の作成に取り組んでいる頃、若月保治(紫蘭 1879-1962)氏が狩野文庫金平本の調査に訪れている。その結果が『別置本目録』に反映されたことは、前に記した。若月氏はその時のことを「思ひ出せぬ仙台」(昭和12年2月)⁹という仙台にとっては些か不名誉な題名の文章に記している。ただ題名とはうらはらに、当時の仙台の街の何ということのない日常の有様などが、来訪者の目を通して捉えられているのも仙台在住者にとっては

8 『古淨瑠璃の新研究』若月保治 慶長寛文篇 序・覚書 参照

興味深く思われる。

停車場で自動車に乗ろうとすると人力車が近付いてくる。「この二十年も、東京ではもう見られなくなった人力車に乗るもまた一興だ」とみぞれ路を人力車に揺られて行く。附属図書館の古浄瑠璃本を調査する合間に、松島や瑞鳳殿（伊達政宗霊廟）などの名所旧跡見物をし、東一番町や文化横丁を散歩し細かな観察を記す。のんびりしているようでも物価は東京に比べて決して安くない。春の彼岸の時期であったので「彼岸の墓参用として、夜店で造花の菊を盛に売つてゐるのは珍らしかつた。（中略）その後墓地の付近を通る時に気がつく、墓といふ墓はまるでこの造花の菊でうづもれてゐた。」¹⁰ (P79)。

そして「一週間の仙台滞在中、私は大学の図書館長村岡典嗣氏から、種々の便宜を与へて貰つたことを謝して、此のペンをおくと同時に、氏がロンドン留学中に発見して買つて来たといはれる『木曾物語』と『松浦合戦』の二種の古浄瑠璃を貸して貰つて、近く刊行しようとする『古浄瑠璃の新研究』中に之を紹介し得ることを非常な喜びとすることを付加しておかねばならぬ。」(P81)と結んでいる。

若月保治氏は東京帝国大学英文科を明治36年卒業、夏目漱石の教えを受けている。メーテルリンク『青い鳥』の翻訳でも知られているが¹¹、西洋近代劇から国劇さらに近松浄瑠璃と遡り、この時期は古浄瑠璃研究に「殆ど寝食を忘れるといつてもいゝ位に」（『古浄瑠璃の新研究 慶長寛文篇』序p3）没頭した。また、仙台との関係では、仙台浄瑠璃（御国浄瑠璃）の研究を行っている¹²ことを付け加えておきたい。

若月氏の研究は『古浄瑠璃の新研究』慶長寛文篇・延宝享保篇・補遺篇（新月社 昭和13年-15年）¹³にまとめられているが、本館所蔵阿部（次郎）文庫の『古浄瑠璃の研究 慶長寛文篇』には、阿部次郎宛の献辞【写真13】がある。

一方、横山重（1896-1980）氏は、昭和11年『別置本目録』刊行の頃、仙台まで調査に訪れている。氏の回



【写真13】

想記には阿部次郎をはじめとする東北帝国大学教官との交流が記されている。

昭和十一年の夏の頃、わたしは太田〔武夫〕君と藤原弘君を伴つて、仙台へ赴いた。すでに、東大、京大、彰考館、安田文庫、元の久原文庫、甘露堂文庫、岩瀬文庫は、一とほり終つた後であつた。仙台駅には阿部〔次郎〕先生が御いで下さつた。そして、われわれを伴つて、先生の懇意な旅館へ行かれ、わたし共の滞在がやや長びくからとて、宿泊料の割引のことまで依頼して下さいました。

「竹林抄古注「後記」 昭和四三・一一・二四¹⁴ p14

横山氏は慶應義塾大学在学中に阿部の講義を受講している（同書 p34-35）。横山氏はしばしば阿部の自宅を訪問し、定められた「面会日」には東北大学の文科や法科の学生が来ていて、その学生達とハイキングにも出かけている。そのころは阿部も江戸時代に心を寄せることが多くなっている時期であつた。

わたし共が面会日でない日に参上すると、先生の書齋に通された。先生は面会日の時より更にくだけて、近ごろは江戸時代のものに心を引かれることが多くなつたと言はれた。そして、上京の度に、江戸時代の本や絵画を買ふことが多いと言はれ、その中の幾つかを見せて下さつた。その中に芝居絵があつた。わたしは、二十年も前の大正の中期に、市村座の先生の棧敷に招かれて、菊吉の芝居を見たことを言つた。さうか、あ

9 『心の旅 俳諧紀行』若月紫蘭 新月社 昭和19年 本館蔵本は著者寄贈本。なお、先に引用した矢島氏の記述とは氏の調査時期や期間が異なるが、昭和十年四月十五日付「別置本目録（狩野文庫）」で既に分類の修正が行われているので、若月氏の指摘があつたのはこの三月の調査中であると思われる。

10 この「造花」については『宮城県百科事典』河北新報社 昭和57年「削り花」参照。

11 『心の旅』に「『青い鳥』は四回も改訳す」（略歴と著書）とある。『東京年中行事』若月紫蘭著・朝倉治彦校注 1（東洋文庫 106）平凡社 昭和43年「解説」朝倉治彦 p285

12 「仙台浄瑠璃と古浄瑠璃」若月保治『国語国文』9-10 京都帝国大学国文学会 昭和14年10月・『古浄瑠璃の新研究 補遺篇』等

13 『古浄瑠璃の研究』若月保治著 桜井書店 では仙台浄瑠璃は第四巻（昭和19年）になる。

14 引用は『横山重自傳 集録』原秋津編 平成6年 による

の頃からそのきざしはあつたのだねと言はれた。(同 p15)

阿部から法文学部の同僚、山田孝雄・小宮豊隆・村岡典嗣らに面会するようすすめられた横山氏は後に村岡から「氏が滞英中に得られたといふ、明暦ごろの江戸板『きそ物がたり』と、万治三年の京都板『松浦合戦』とを貸与せられ」(p16-17) ている。山田孝雄からは御国浄瑠璃の本の所蔵者を紹介された。

わたし共はよく仙台の街を散歩した。大通りは一筋の長い街であつた。で、その大通りの路上で山田先生に逢つたことが二三度ある。今日は狩野文庫の何をうつしたといふやうなことを申上げた。先生は頷いてをられた。先生は堅い方の学科に限らず、われわれのやつてゐるやうなものにも関心を示された。そして、小倉(博)君の家はあの方角だ、一度たづねておくがよい、お国浄りの本がある筈だとも言はれた。そこでわれわれは、小倉さんを訪ねて、二三の本を拝借した。(同 p17)

小倉博¹⁵ には『御国浄瑠璃 四篇』(小倉博編(仙臺郷土資料) 仙台 無一文館書店 昭和7年) 等の著述があり、同氏所蔵本は若月氏も調査している。

横山氏も仙台滞在中に松島に遊んでいる。ところが体調を崩して入院し「窓越しに時雨のやうな雨を見てゐる内に、ふと限りなき寂寥感と不安感におそはれ」(p19-20) で急遽帰京した。若月氏と横山氏の回想記の感触の相違は両氏の研究手法のそれにも通うようにも思われるが、みぞれに時雨、両氏の描く仙台には寂寥感が漂うのはなぜであろうか。

そうした調査の成果である『古浄瑠璃正本集』の刊行を始めるにあたって横山氏は狩野亨吉に背文字揮毫を依頼した。

わたしは、「古浄瑠璃正本集」の背文字を書いていただいた。〔狩野亨吉〕先生は、実に謹んで、ゆつくりと書いてくださった。冊数を示す数字も、一から十まで、書いていただいた。

「二か三のところで、わしは死ぬ」と先生は書き終わってから、そう言われた。「まだ二十も三十も正本が出るかもしれない。わしは何となく、そんな気がする」そういう時、先生はいかにも、愉しそうで、無邪気であつた。『書物搜索』横山重 下 p238

『古浄瑠璃正本集』第一冊は昭和14年に、第二冊は昭和16年に刊行されたが、戦争のため中断、第三冊は昭和39年の刊行となった。狩野亨吉は昭和17年に死去したので、第二冊刊行の後に亡くなったことになる。関東大震災の損害は大きかったが、なお多くの本が何処かに残されていることを狩野は予測していたのであろう。

昭和57年2月『古浄瑠璃正本集』第十冊が刊行された。横山重氏は昭和55年10月に亡くなっている。横山重氏が収集した古浄瑠璃本類は大阪大学附属図書館赤木文庫100点(内4点は信多純一氏寄贈本)¹⁶ となった。

狩野文庫公平本の多くがこの『古浄瑠璃正本集』や『金平浄瑠璃正本集』『説経節正本集』等¹⁷ において翻刻紹介されている。

(おおはら りえ、学術資源研究公開センター・史料館助教、附属図書館協力研究員)

【目録訂正一覧】

- 「原題簽あり」記述追加：綱金時最後(字 7-778)・天狗羽討(字 7-779)
- 「〔須田〕の印記あり」記述追加：楠正成家伝之軍法(字 7-767)
- 「大型」→「大形」：清原のう大将(字 7-759) 公平かぶとろん(字 7-760)・公平花だんやぶり(字 7-761)・公平化生論(字 7-762)・公平末春いくさろん(字 7-763)・公平たんじやうき(字 7-765)

15 小倉博と郷土研究については「仙台人物誌」(『仙台市史』7 別編5 昭和28年) p44- 『宮城県百科事典』河北新報社「奥浄瑠璃テキストの性格」真下美弥子(『奥浄瑠璃集成』1 伝承文学資料集成10 三弥井書店 平成12年) 等参照。博は東北帝国大学附属図書館(現東北大学史料館)設計者小倉強の兄。

16 『赤木文庫(古浄瑠璃)目録』大阪大学附属図書館 昭和60年

17 『古浄瑠璃正本集』横山重・藤原弘・長井光美・森武之助・太田武夫校訂 第1-第2 大岡山書店 昭和14年-16年『古浄瑠璃正本集』横山重校訂 第1-第2 増訂版 角川書店 昭和39年『古浄瑠璃正本集』横山重・室木弥太郎・坂口弘之編 第3-第10 角川書店 昭和39年-57年『説経節正本集』横山重・藤原弘校訂 第1-第2 大岡山書店 昭和11年-12年『説経正本集』1篇-3篇 横山重編 角川書店 昭和43年『金平浄瑠璃正本集』室木彌太郎編 第1-第3 角川書店 昭和41年-44年